Actions
アクションズ
若手医師活動報告

報恩謝徳
～地方初期研修医奮闘記～

帯広厚生病院臨床研修センター　初期研修医
和田（わだ）　侑也（ゆうや）

1998年札幌生まれ。2017年札幌南高校卒業。2023年北海道大学医学部卒業。2025年帯広厚生病院初期研修修了。同年より北見赤十字病院内科専攻医として勤務予定。美味しいご飯とお酒が好き。ちょっとギターを弾きます。
Instagram：@yu_matologist

この度、日頃よりお世話になっている皆様に、私の活動をご報告させていただける機会を頂戴したことを心より感謝申し上げます。また、僭越ではございますが、私のこれまでの経験や活動が、初期研修をこれから始める方々や、現在地方で初期研修を行っている方々の励みになりますと幸いです。

【第一章　Medii臨床グランプリ参加】

株式会社Medii主催で開催された「臨床グランプリ」に、2023年10月（第２回）、2024年５月（第３回）と参加いたしました。Mediiは、「誰も取り残さない医療を」をミッションに、オンラインで専門医に相談できる「Eコンサル」を提供する企業です。

小松守先生（帯広厚生病院総合診療科医長）と竹内空先生（北海道大学麻酔・周術期医学教室）にお誘いいただき、チームの一員として大会に挑戦しました。第２回大会では６位（全11チーム）、第３回大会では２位（全15チーム）という結果を残すことができました。

Mediiの社長である山田裕揮先生とは、2024年９月に開催された第29回日本病院総合診療医学会学術総会でも直接お話をさせていただくことができました。山田先生は、自分が志している膠原病内科の医師でありながら、研究者、起業家という多才な方で、憧れの存在の一人です。

【第二章　レジ王決勝進出】

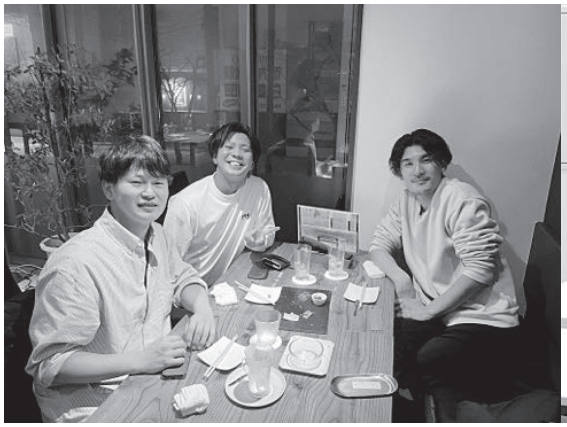
第７回レジデントチャンピオンシップ2024（通称：レジ王）の予選を通過し、2024年３月17日に行われた決勝大会に進出しました。初期研修医１年目の最後に参加したことで、全国の優秀な研修医に驚くと同時に、２年目の学習目標を明確化させることができました。坂本壮先生（国保旭中央病院　救急救命科医長）との交流ができたことも良かったです。

【第三章　日経メディカル記事掲載】

救急外来で日々診療する中で、診断エラーを学ぶ必要性を感じて、研修医同期の荒井駿佑先生と診断エラー勉強会（通称「シマエナガの会」）を2023年10月から院内で開催していました。その活動内容を2024年12月26日に日経メディカルの記事に投稿する機会を頂戴しました。同期の荒井先生なくしてシマエナガの会は成り立ちませんでした。また、小松先生、竹内先生には会のサポートだけではなく、日常診療でも多くのご指導を頂戴しました。本当にありがとうございました。（日経メディカルの記事：https://medical.nikkeibp.co.jp/leaf/mem/pub/series/dxbias/202412/586967.html）

【第四章　ドクターG NEXTへの出演】

2025年１月15日の夜にNHK総合で放送されました「総合診療医ドクターG NEXT（第２回）」に出演いたしました。番組は、以前人気を博した「総合



診療医ドクターG」の復刻版で、2024年７月10日に第１回放送があり、今回は第２回放送でした。医師の診断プロセスを描いた医療エンターテインメントで、実際の症例を基にした再現ドラマを提示し、研修医３名と「ドクターG」と呼ばれる総合診療医または救急医がカンファレンス形式で病気を探り出す構成となっています。

先述したMediiの山田先生も研修医時代にドクターGに出演されており、また、坂本先生がドクターG　NEXT第１回放送の「ドクターG」だったこともあり、ご縁を感じて出演を決意しました。

収録は東京のスタジオで行われ、カメラマン、照明スタッフ、メイク担当の皆様に囲まれた非日常的な雰囲気を味わうことができました。研修医として出演したのは、有賀縁先生（石巻赤十字病院）、中島梨沙先生（南奈良総合医療センター）、そして私の３名でした。台本はなし、ゲストの方々がリハーサルをしている間は別室で待機、研修医が参加するリハーサルは直前の短時間のみ、というネタバレ厳禁、ほぼぶっつけ本番という状況でした。収録の直前に遅めの夏休みで旅行に行っており、ダイエットに失敗し、テレビ写りが不安でしかなかった私ですが、待機時間に有賀先生や中島先生と談笑し、緊張が和らぎました。

私たちの回の主訴は「突然腰が痛くなった」でした。ドクターGとして出演された望月礼子先生（鹿児島大学救命救急センター特任講師）は、自己紹介の際にキンタロー。さんの「トゥームレイダー」のネタを披露されるほどパワフルな方でした。検査所見ではなく、病歴（特に痛みの経過）に焦点を当てたアプローチは、非常に勉強になりました。収録は４時間半ほどに及び、さすがに疲れましたが、終了後には有賀先生、中島先生、望月先生、そしてアシスタントの中村龍太郎先生（ふく在宅クリニック）とともに打ち上げに行き、とても素敵な思い出になりました。

１回目の病名提示の際、私は緊急疾患の王道ともいえる大動脈解離を挙げましたが、ツイキャスで副音声実況をされていた、同じ北海道厚生連でつながりのあった市原真先生（通称：ヤンデル先生、札幌厚生病院病理診断科主任部長）が、「解離を鑑別として挙げたのは良かった」とおっしゃってくださり、ホッとしました。

放送後は、古い友人や高校時代の恩師、学生時代に家庭教師をしていた生徒やそのご両親など、多くの方々から連絡を頂戴し、久しぶりに近況を話すきっかけになりました。そして両親、祖母、姉も出演をとても喜んでくれ、それが何より嬉しかったです。多くの方々に支えられ、見守られながらここまで来られたことを改めて実感しました。このような貴重な機会をくださった番組制作の皆様、ゲストの皆様、Mediiの皆様、共演してくださった有賀先生、中島先生、そして望月先生、中村先生に心より感謝申し上げます。また、快く送り出していただき、応援してくださった帯広厚生病院の皆様にも感謝いたします。

【第五章　学会発表と指導者たち】

初期研修最初のローテーションで膠原病内科を選択経験し、清水裕香先生（帯広厚生病院消化器内科主任部長）をはじめとする指導医の先生方や、患者さんとの出会いを通じて、膠原病内科を志す決意を固めました。そして第68回日本リウマチ学会総会・学術集会、第121回日本内科学会総会・講演会、第29回日本病院総合診療医学会学術総会といった全国学会での発表の機会も頂戴しました。学会発表や論文作成に際してご指導いただいた蜷川慶太先生（斗南病院リウマチ・膠原病科医長）に、心より感謝申し上げます。蜷川先生は誰に対しても優しく、さらにタフで、ハードワークに取り組む姿勢が私にとっての仕事スタイルの模範となっています。

【Special Thanks！】

今回の寄稿では主に院外での活動についてご報告させていただきましたが、非常に充実した院内の研修が全ての礎となっています。研修医の同期や先輩・後輩と共に過ごした２年間は、数え切れないほどの思い出と学びに満ちた時間でした。膠原病内科専攻医として研鑽を積み、努力を続けることで、頂戴した恩や徳に感謝し報いてまいります（報恩謝徳）。これからもご指導、ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。